

Ⅱ. 製品安全ガイド

様々な製品が市場にあふれ便利で豊かな生活を送るために活用されています。その一方で、製品事故も発生しています。製品事故が起きないように次のことを心がけるとともに、万が一、事故が発生した場合の対処方法も学んでおきましょう。

なお、平成6年に制定された消費者保護のための製造物責任法（PL法）により、製品の欠陥を証明できればメーカー保証が過ぎてからでも流通後10年間までは損害賠償が請求できます。

1. 製品事故を防ぐには

(1) 製品を購入するときの主な留意点

- ①無駄な買い物にならないように、購入したい製品の最低限必要な機能を決めておく。
- ②カタログや展示品の操作、店員の説明などにより、購入したい製品の安全性や品質、機能をよく把握し、予算内で、より良いものを選択する。

(2) 使用上の留意点

- ①使用前に必ず取扱説明書を読み、禁止事項などを確認し、必要なときにすぐに取り出して読めるように、取扱説明書を保管しておく。
- ②メーカー等が記載している点検や手入れなどの周期・内容を必ず守り、日頃使っている製品に異常はないか、定期的にチェックする。
- ③家電製品等は使用していなくても経年劣化するので、長年が経過した家電製品等に異常が見られたら、使用をやめて電源プラグを抜き、販売店やメーカーに相談する。

〈こんな症状が出たら要注意！〉

異常な音がする

異常に熱い

焦げくさい

ビリビリ電気を感ずる

など…

2. 家庭で製品事故が起きてしまったら



(1) 現場の状況を記録する

発生の日時、場所、状況をメモし、事故状況をカメラやビデオで詳細に撮っておく。現場にいた人に証人になってもらう。けがなど身体に被害がある場合は病院の診断書をもらう。火が出て周囲が燃えた場合は消防署へ連絡する。

(2) 原因究明のため事故品を手元に保管する

事故品は安易に捨てないようにし、消防署に引き渡す場合でも、預かり証をもらっておく。

(3) 事故情報を消費生活センターはじめ関係機関やメーカー等に連絡する

最寄りの消費生活センターやメーカー（火災を伴う場合、最寄りの消防署にも）に事故情報を連絡する。製品の購入時期や使用状況などの経緯を簡潔にまとめ、関連資料（取扱説明書、保証書、契約書、パンフレットなど）もひとまとめにしておく。

便利な自転車「ついつい、うっかり、あわてて」使用し、事故に!

日常の点検の怠りや、調子が悪いけど少しの間なら…などと、わかっているもついうっかり使用したことが原因と思われる自転車の事故が発生しています。あつとき、修理しておけば…と後悔しても遅いのです。自転車には、走行先の人や物を事故に巻き込んだり、他車の事故に巻き込まれる危険性があります。日常のメンテナンスを十分に!

事例

クイックリリースハブ（工具を使わなくても車輪が着脱できる仕組み）が搭載された自転車で、固定が不十分だったため、走行中に前輪が外れて転倒し負傷した。

アドバイス

- ・乗車前にチェーンのたるみ、ブレーキのきき、車輪やペダルの取り付けなどの点検を必ず行いましょう。
- ・日常的な点検整備のほかに、少なくとも1年に一度を目安に販売店などで定期的な点検整備を行いましょう。
- ・走行時はヘルメットをかぶりましょう。
- ・自転車保険に加入しましょう。



スマートフォンやモバイルバッテリーで火傷や火災に!?

スマートフォンやタブレット端末、モバイルバッテリーなどに使用されている「リチウムイオン電池」は、充電して繰り返し使用でき、小型で多くのエネルギーを蓄えられるなど便利な一方、発煙、発火といった事故も発生しており注意が必要です。

事例

就寝中にスマホを充電していたら、起きたときに焦げ臭いにおいがして、充電器とスマホの差し込み口が焦げていた。



アドバイス

- ・充電端子が熱くなったり、異臭がするなど異常を感じた場合は直ちに使用を中止しましょう。
- ・リチウムイオン電池に膨張がみられたら使用を控え、交換または適切に廃棄しましょう。
- ・充電器の定格出力を確認し、接続するスマートフォンやモバイルバッテリーなどの仕様に応じて適切な充電器を使うようにしましょう。
- ・使用中や充電中は発熱することを認識し、熱がこもる環境に置かないようにしましょう。
- ・製造・販売元・型式が明示されていない商品や、仕様が不明確な商品を購入するのは避けましょう。
- ・使用済みモバイルバッテリーはリサイクルに出しましょう。やむを得ず廃棄する際には自治体のルールに従い家庭ごみと区別して出しましょう。ごみ収集車やごみ処理施設で押しつぶされると、発火し、作業員がけがをしたり、火災の原因になります。